

3．学年研究の方向

(1) 1 学年

1 年児童の実態

就学前に 100 程度までの数を正しく唱えたり，数字を書いたりすることのできる児童が各クラスに数名はいる。また，100 以下の数字を読むことのできる児童は大勢おり，教科書のページをすばやく開き作業に取り組む姿も見られる。しかし，数について理解しているかどうかは今後実態調査をする必要がある。数の理解はこれまでの生活経験と大きく関わってくることであるが，入学時点ですでに個人差は大きいと思われる。

現在は 10 までの数について正しく数えることができ，数字を読んだり書いたりすることができるように学習をしている。

指導の方向

- ・単位時間ごとに形成的評価をして理解度，習熟度を確認する。
- ・具体物を使い，操作活動を多く取り入れる。
- ・学習内容に遊びの要素も取り入れ，数の感覚を養う。
- ・TT による指導（非常勤講師が配置されている）
- ・席の配置と座席表の工夫
- ・家庭との連携を図り，家庭学習の充実をめざす。

(2) 2 学年

2 年児童の実態

- ・2 月実施の C R T－分析結果を見ると，数と計算，量と測定の分野よりも，図形の分野に落ち込みが見られた。この結果が意識調査や学力調査とどのように関わっているのかは，今後くわしく調べていきたい。
- ・算数に関する意識調査では，算数が好きと答えた児童が 46%，ふつうと答えた児童が 44%，きらいと答えた児童が 10% だった。

現時点での学習内容は，1 年生での既習事項を使って解く問題が多い時期でもありまだそれほど難しくはない。単元内容によっても意識は変化することが考えられるので，今後，難しい内容を学習した場合，きらいと答える児童が増えることも予想される。

指導の方向

- ・算数への苦手意識を克服させるための算数的活動を考え，楽しく学習させる。
- ・1 時間内の児童の学習状況や達成度，問題点などを的確に把握するため，ノートを有効に使わせ，常に目を通すよう配慮する。
- ・各自が毎時間「できた」という成就感を味わうことができるよう，授業の目標を的確に定め，無理なく少しずつステップアップするような授業計画をたてる。
- ・時間内にできなかった児童の支援方法を工夫する。
- ・スキルタイムの有効な活用方法を工夫する。
- ・児童同士の関わり合いを大切にし，互いに学び合い，高め合っていける活動の場を多く設ける。

(3) 3 学年

3 年児童の実態

- ・ 教研式 CRT 分析結果から、全体的として見るとほぼ全国レベルに達している。
- ・ 上位群，中位群の児童が多い。
- ・ 数と計算，量と測定は全国平均を越えているが，図形領域は下まわっている。

指導の方向

- ・ 効果的な習熟度別指導のあり方→グループ毎の難易度の吟味→
- ・ 個人データの蓄積→集計ソフトによるテスト結果の多面的分析
- ・ 個人データの分析結果を生かし，個に応じた指導を展開する
- ・ 数と計算の領域を重点的に指導する
- ・ 基礎・基本を身に付けるための繰り返し学習
(1 0 0 ます計算，算数スキル，個別指導)

スピード 課題の質 課題の量

(4) 4 学年

4 年児童の実態

- ・ 学習に対する興味関心を持ち，課題に対してこつこつと取り組む児童が多い。
「わかる」「できる」ことから，算数を好きと感じている子どもは確かにいるが，算数のおもしろさを感じながら学習している子が少ない。
- ・ 成績には大きな差がなく，ほとんどの児童が中位群を中心に集まっており，飛び抜けた成績を示す児童もいない。だが，意欲の面から実力を発揮していない児童と，努力にも関わらず結果のでない児童が全体に対して 1 7 % ほどをしめることが気がかりである。4 つの領域すべてで同様の傾向が見られる。この下位群に対する指導のあり方が大きな課題である。

指導の方向

基礎基本の習得状況を的確に捉えるために行うこと

- ・ 事前テストおよび指導途中でのテストの実施
- ・ マス計算の個人記録と作問指導：
作問では問題の意味を捉え，解決方法を身につけているかを種々の問題において調べ，その都度個別に指導する。
- グループ（個）に応じた指導法の工夫について
- ・ 学び方のタイプを見分ける：ゆっくり自分のペースで学ぶタイプなのか，皆と競いながら進む学ぶタイプなのかを見分ける。
- ・ 内容の精選と比重の吟味：グループによっては，思い切って，指導内容を精選したり，指導時間を多くかけたり，グループをさらに小グループに分けたりして個に応じた内容で指導にあたる。
- ・ 座席の工夫：個別指導をより多く必要とする児童に目が行き届き，常に声かけができるような席を工夫する。

算数の学習のおもしろさを感じ，思考することの楽しさを感じる学習問題の開発，教材・教具の工夫について

- ・ 基礎基本となる学習を定着させ，発展の学習としての文章問題作り（作問）。
国語力を養う国語の作問指導と連動させて，思考力を養う。より高度な問題に挑戦したい児童には発展的な内容の応用問題を開発して準備する。
- ・ 算数的な活動をより多く取り入れ，算数のおもしろさを体験ができる教具を用意する。
- ・ 自力解決できたときに児童は大きな喜びを得るので，自力解決の糸口となるものを提示しておく。

(5) 5 学年

5 年児童の実態

- ・総合的な算数の力は、全国通過率を下回る。上位群に比べ、下位群の人数が多いのも特徴である。
- ・関心・意欲の面でも全国に比べ、あまり高くない傾向が見られる。
- ・数学的思考は、全体平均が全国通過率を上回っているが、中・下位群に偏りが見られ、思考力の差が大きくなっている。
- ・表現・処理が、全国通過率に比べ著しく劣っている。
- ・知識・理解については、80%以上の児童がおおむねできている。
- ・「数と計算」「数量関係」が全般に力が劣ると言える。特に「数と計算」では、「整数のかけ算やわり算」が全国通過率(69.0)に対し、58.1 と低く、「小数と分数」でも全国通過率(79.8)に対し、69.2 とこれもまた大きく下回っている。
- ・小問内容では、数直線を読みとることや単位換算は全国通過率を上回っていた。しかし、3 位数や4 位数までのかけ算やわり算、四則混合算、括弧のある計算、面積等を苦手としている児童が多い。

指導の方向

「児童一人一人の学習の習得状況を的確に捉える」手立て

- ・教研式 C R T - の分析
- ・日常の評価の累積→グループの継続指導(グループの固定)
- ・ミニテストによる到達度の把握
- ・学習状況の観察(意欲・態度)・・・教師の側から
- ・意識調査(関心・意欲)・・・児童の側から
- 「個に応じた指導を行う」ための手だて
- ・習熟度別グループの学習目標を明確にする。
- ・基礎に重点を当てるグループ、発展的な学習に積極的に取り組むグループなど、児童の実態に合った到達目標を設定し指導する。
- ・習熟度別グループ学習に応じた授業内容の工夫する。
- ・教材研究、教材開発、学習形態の工夫など
- ・児童の実態に応じた家庭学習を与える。
- ・習熟度別グループごとに課題に取り組ませる。

重点指導事項

- ・計算力を身につけ、算数に対する自信をつけさせる。(まず計算)
- ・重要な学習内容の反復練習(時間が許す限り、何度も練習して定着させる。)

(6) 6 学 年

6 年児童の実態

教研式 CRT 分析結果を見ると、どの領域においても全国を下回っており、上位群と下位群の差が非常に大きい。

「量と測定－いろいろな図形の面積」では全国平均が 57 % なのに対し 48 % とかなり低い通過率である。また、正答率が半分に満たない児童が 20 %、正答率 52 % 以下の児童は全体の 30 % を越える。100 問わり算で計算力アップを図り、グループ別指導の中できめ細かな指導を行う。

各グループにおける児童の実態

- A：教科書程度の問題についてはほぼ理解できる。單元ごとに初級から上級までの難問に取り組ませている。中級問題は約半数が解ける。上級では 3 ～ 4 人の正答者が見られる。A グループでも学力の差が大きい。
- B：理解度の高い児童が多いが、ケアレスミスが目立つ。計算力には開きがあり、問題を解く時間に差がある。毎時間 100 ます計算（主にわり算、引き算）を実施している。教科書の問題、計算ドリル、形成プリントの他に問題集プリントに取り組ませ、数多くの問題を解かせている。テストは 100 点になるまで実施後の指導を行っている。
- C：4 月からの單元である「約数と倍数」「分数の加減計算」についてはワークテストで 8 ～ 9 割を超える理解度を示している。（5 年ですでに学習した單元）ドリル学習で定着を図ることと個に応じた指導に重点を置いている。分数でつまづく子が半数いる。文意を把握させ立式につなげさせるために、問題文をセンテンスで区切り何を求める問題なのかを分からせるようにしている。2 位数 ÷ 1 位数について筆算を必要とする児童が何人か見られる。計算力の向上を図りたい。
- D：どの児童も意欲的に取り組んでいる。49 問ます計算（加減乗除）はほぼ 1 分台でできるようになった。観点別に見ると「知識・理解」はできているといえる。文章題では遅れを感じる子が多い。
- E：全体的に意欲的に学習に取り組んでいる。向上心もある。テスト結果も良い。「分数の加減計算」「同分母どうしの計算」がやっとなってきた。

指導の方向

- ・実態調査の結果をもとに、一人一人の理解度や学習状況、児童の得意な領域とそうでない領域等を把握し、個に応じた指導を行う。
- ・「算数の手引き」で示された内容を全ての児童に確実に身につけさせる
- ・個人の習熟度に応じたグループ別指導を実践していく。
 - （上位群）→教科書の学習内容から発展した難問に取り組ませていく。
 - （中位群）→教科書の内容を中心に学習指導を進める。
 - （下位群）→本校「算数のてびき」に従い学習指導要領で示された内容を精選し、最低限身につけさせたい基礎的・基本的な事柄について繰り返し徹底指導を行う。
- 基礎・基本を習得するための土台づくりとして
 - ・100 問わり算の継続実施（スキルタイムの継続活用）
 - ・個別指導